和

小野 真由美
の空間を奏でる #1

特別出演
村　尚也 [お話]

野口 敏翠 [箏]
菊央 雄二 [胡弓]
梅屋 喜三郎 [囃子]

【演出】加藤繁治
【進行】渡辺清弘

1 盤渉六段の調
箏独奏　小野真由美

2 都十二月
唄と三絃　小野真由美
箏　野口　敏翠
陰囃子　梅屋喜三郎

3 影法師
唄と三絃　小野真由美
胡弓　菊央　雄司

2022年11月26日(土)

■**昼席**｜14:00開場｜15:00開演｜御席料¥6.000(定員40名様)
開演前にお茶とお菓子のご用意がございます

■**夜席**｜16:30開場｜17:00開演｜御席料¥20.000(定員40名様)
終演後にご宴席(松花堂弁当)のご用意がございます

玄冶店 **濱田家**

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-13-5 TEL/03-3661-5940
東京メトロ日比谷線・都営地下鉄浅草線人形町駅(A4)から徒歩約1分
東京メトロ半蔵門線水天宮駅(7)から徒歩約8分
都営地下鉄新宿線浜町駅(A1)から徒歩約8分

【ご予約お取り扱い/お問合せ】ACJA事務局 090-7827-5370 Email: contact@acja.jp

和の空間を奏でる

六段の調
(ろくだんのしらべ)

八橋検校作曲

2019年にオーストリアアイゼンシュタットにあるハイドンホールという古いヨーロッパのホールでコンサートをさせていただいたときから、古い木造建築の中で響く音色への憧憬の気持ちを抱き続けておりました。優しい木の温もりに包まれる音の響きを、流れる風を五感にお感じになりながらお楽しみいただければと存じます。

まず最初は、四百年以上の長きに亘って人々の心に、祈りと安らぎを伝え続けている名曲「六段の調」をお聴きください。この曲は、主音を双調(G)にとるチューニングが一般的なのでございますが、今回は、低すぎず高すぎず、心が一番落ち着く盤渉調(B)で演奏させていただきます。

都十二月
(みやこじゅうにつき)

作曲者不詳/作詞者不詳

作物(さくもの)に分類される曲で、19世紀半ばの歌本に初出します。江戸時代には「都土産」と呼ばれました。歌詞は、京都の年中行事と風物を、旧暦の正月から十二月まで、次から次へと綴ります。一部をあげれば、正月は門松、七草、門付け芸、二月は伏見稲荷の初午祭、釈迦の入滅を偲ぶ涅槃会、三月は雛祭、四月は釈迦の誕生日の花祭、五月は端午の節句六月は八坂神社の祇園祭、七月は七夕、盂蘭盆会、五山の送り火、八月は中秋の名月、続いて、菊月や後の月とも呼ばれる九月は三夜の月見、十月は十夜法要と戎講、十一月は顔見世十二月は正月の準備を始める事始めを紹介します。(邦楽ジャーナル所蔵・野川美穂子執筆)

雅子言葉や擬音を織り交ぜて、都の賑わいをお感じいただけるよう工夫されている楽しい曲です。本日は、お囃子の面白さに工夫を加えたアレンジでお聴きいただきます。

今年もいろいろなことがございました。皆様の一年をお振りかえりになりながら、また新しいお年に想いを巡らしながら、ご一緒にお楽しみいただければ幸いでございます。

影法師
(かげぼうし)

幾山検校作曲/橘万丸作詞

"影法師"、なんと懐かしい言葉でしょう。影は男も女も大人も子供も、まぁるい頭でお坊さんのように映るものですから、影の法師と名付けたのです。日向ぼっこの白壁にもくっきり影が映りました。夕方の影踏みも懐かしい思い出です。しかし何といっても影を如実に感じるのは、夜の灯かげの影でありましょう。地唄の『影法師』は時雨の降る冬の夜に、置炬燵にあたりながらうたた寝をしてしまいます。ふと目が覚めて、灯火にゆらぐ自分の影に向かって話しかけるのです。「やつれしゃんしたお前の姿、私が痩せたも道理じゃと私が泣けばお前も涙」とうたいます。この時代の灯りはろうそくか行灯でしたから、火かげが揺れますと影も動きますので、よりいっそう自分の分身か、またはもう一人の自分を感じることが出来たのだと思います。冒頭に「あれ聞けと時雨くる夜の鐘の聲」という宝井其角の句を置いて、実に見事な背景を捉えました。ー中井猛著ー(邦楽ジャーナル別冊地唄うた暦より)